

「キャンパス・アジア」モニタリング

モニタリング報告書

大学名	神戸大学	
取組学部・研究科等名	大学院国際協力研究科、人文学研究科、自然科学系先端融合研究環都市安全研究センター	
構想名称	東アジアにおけるリスク・マネジメント専門家養成プログラム	
海外の相手大学	【中国】	復旦大学国際関係・公共事務学院
	【韓国】	高麗大学校国際大学院

平成26年1月

独立行政法人大学評価・学位授与機構
「キャンパス・アジア」モニタリング委員会

「キャンパス・アジア」モニタリング報告書について

「キャンパス・アジア」のモニタリングは、日中韓質保証機関協議会*¹が実施するプロジェクトで、「キャンパス・アジア」パイロットプログラム*²をケース・スタディとして取り上げ、プログラムの優良事例を抽出しながら、国際的に連携した教育を展開するうえで「保証すべき質」についてより明確にし、3か国間で共通の質保証機関のガイドラインを作成することを目指しています。

モニタリングでは、プログラムの最低限の質を確認するような評価ではなく、国際的に連携したプログラムの現状や質向上にかかる活動を把握・確認し、**教育の質の観点から優良事例を抽出して、それらを国内外に広く発信していくことを目的**としています。

「キャンパス・アジア」パイロットプログラムは、2011年に開始され、5年間のプログラムとして採択されています。その間において、日中韓質保証機関協議会は、モニタリングを2回実施することとしています。1回目のモニタリングは、日中韓各国における関連法規や評価制度・手法を踏まえて、各国が個別に実施することとしました。

パイロットプログラムの取組みは今年度で3年目を迎え、交流の動きも本格化しています。1回目のモニタリングでは、機構の「キャンパス・アジア」モニタリング委員会が定めたモニタリングの基準に基づき、各**プログラム実施主体が平成24年度末までの取組みについて自己分析を行いました。この自己分析書に対して書面調査を行うとともに、訪問調査を通じて今年度（平成25年度）までの取組状況を聴取**しました。

本報告書は、そのモニタリング結果をまとめたものです。なお、**優れた取組みの抽出**にあたっては、当該大学の自己分析書の文章をもとにし、説明に際して最低限必要な修正を加えました。

さらに、プログラムの今後一層の進展に資するため、**大学から今後の課題点を記載していただき、それに対するモニタリング実施側からのコメントを付記**して、本報告書に掲載しました。なお、このコメントは、モニタリング委員・専門委員の立場からのもので、モニタリング委員会全体の意見を代表するものではありません。

※本報告書の形式について

基準1から4の各基準毎に、「取組みの特徴」の後に、「抽出した優れた取組み」を枠内（）に示し、その理由を付しています。

なお、本報告書の電子版およびモニタリングの基準やプロセスをまとめた『「キャンパス・アジア」モニタリングハンドブック』の電子版は、大学評価・学位授与機構ウェブサイト（http://www.niad.ac.jp/n_kokusai/jckcouncil/campusasia_monitoring.html）をご覧ください。

*1：大学評価・学位授与機構、中国教育部高等教育教学評価センター（HEEC）、韓国大学教育協議会（KCUE）の3つの質保証機関から構成。

*2：平成23年度大学の世界展開力強化事業タイプA-I：日中韓のトライアングル交流事業として採択された10のプログラム

<目 次>

I	モニタリング結果の概要	1
II	基準ごとのモニタリング結果	
	基準 1 教育プログラムの目的	2
	基準 2 教育の実施	
	基準 2－1 実施体制	5
	基準 2－2 教育内容・方法	7
	基準 2－3 学習・生活支援	10
	基準 2－4 単位互換・成績評価	13
	基準 3 学習成果	16
	基準 4 内部質保証システム	18

<付録>

採択プログラム実施主体から提出された自己分析書

I モニタリング結果の概要

総 括

リスク・マネジメント専門家養成という目的のもと、大学間での役割分担を伴うプログラムデザインが図られており、目的の設定とそれに基づく取り組みが進展している。

参加大学間でのコンソーシアム委員会、実務者会議が整備され、実施面での課題を共に検討する協力体制を構築しているとともに、神戸大学ではキャンパスアジア室を設置して中国語・韓国語ネイティブや両国での教育研究経験を有する者を任用して学習・生活支援を行っていることは進展している取組みである。学習・生活支援については、国際機関の人事担当者による就職セミナー開催など学生の就職・キャリア開発支援を考えた取り組みを行っているなど、進展している。単位互換については、システムが整備され、学位授与については神戸大学内の上位の委員会において確認を行うなど、厳格な手続きが定められており、進展している。

優れた取組み

- ・ 3大学の副学長・理事が出席するコンソーシアム委員会、教員及び事務方担当者の出席する実務者会議など各レベルの会合において、相互のカリキュラムの連携と調整、学生のニーズに応じた講義科目の新設、教育環境の整備状況に関する情報交換、教員レベルの相互交流などについて議論を持ち、プログラム運営に関する認識の共有を確保している。
- ・ 本プログラムの実務関係を担当する「キャンパスアジア室」には、中国語・韓国語ネイティブの者や両国での教育研究経験を有する者、また英語をハイレベルに駆使できる者を任用し、プログラムの運用及び学生のサポートの体制を整えている。
- ・ コンソーシアム委員会において、各大学の履修コースのカリキュラムの水準、単位の認定基準、成績基準等を協議している。科目の成績は各大学が自国の基準によって評価し、単位の認定を行うが、プログラムとしては最終的にプログラム運営委員会におけるコース修了判定を経て、修了証（サーティフィケート）を交付することとなっている。
- ・ 派遣学生及び受け入れ学生に対しては、全員にマンスリーレポートの提出を課し、日常的な学習状況とその成果についての報告を学生から定期的に受けるシステムを整えている。こうした情報は、蓄積のうえ、必要に応じて本学及び留学先大学における学習成果の、単位などの数字に表れない部分に関する定性的な評価、及び学習上の問題点の把握に利用されている。

Ⅱ 基準ごとのモニタリング結果

基準 1 教育プログラムの目的

海外大学との共同教育プログラムの目的が明確に定められ、参加大学の間で共有されているか。

取組みの特徴

リスク・マネジメント専門家養成という目的が明示され、各大学が特色とする内容を提供するという役割分担を伴ったプログラムデザインが図られている。副学長・理事が出席するコンソーシアム委員会、教員及び事務方担当者の出席する実務者会議といった各レベルでの組織の設置により、参加大学間での目標共有の枠組みが整備されている。以上のことから、質を伴った取組みの構築が進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

本プログラムは、東アジア、さらには世界レベルで活躍するリスク・マネジメント専門家—種々の危機的事態に関わる「リスク」を分析して政策策定を主導し、災害の現場でも活躍できる専門家—養成を目指すものである。この人材育成目標を現実化するため、コンソーシアムを形成する三大学院は、それぞれの特性に応じて担うべき役割を分担しており、本プログラムに参加する学生は、各人の問題意識に沿ってこの三大学院における教育を組み合わせ、専門性を持つグローバル人材となるためのキャリアデザインを行っている。

(優れている理由)

世界レベルで活躍する「リスク・マネジメント専門家の養成」という目的が明示され、参加大学間で明確に認識されている。また、1つの大学(院)だけでは提供しきれないプログラムを、それぞれのコンソーシアム参加大学が、それぞれ特色とする内容を提供するという役割分担を行うことでデザインする工夫がみられ、汎用的で可能性の大きい教育プログラムにまとめている点が優れている。今後、「リスク・マネジメント専門家」の人材像をより明確にするとともに、その人材に必要な知識・スキルを明確にし、共有をすすめることが望まれる。

本プログラムにおける教育の中核機関となる三大学院は、共同国際シンポジウム(2012年2月：神戸、2012年11月：上海)の開催や、それに伴って副学長・理事が出席するコンソーシアム委員会・教員及び事務方担当者の出席する実務者会議など各レベルの会合において、相互のカリキュラムの連携と調整、学生のニーズに応じた講義科目の新設、教育環境の整備状況に関する情報交換、教員レベルの相互交流などについて議論を持ち、プログラム運営に関する認識の共有を確保している。また、神戸大学では、キャンパスアジア室を通して、三大学院間の情報交換を恒常的に行い、プログラムの進行に応じて

発生する諸問題を早い段階で把握する体制を整えている。

(優れている理由)

3大学間でプログラムの目的や教育内容等について協議する組織を副学長・理事らのトップレベルのコンソーシアム委員会、ならびに教員及び事務担当者のレベルの実務者会議として組織化し、カリキュラムの調整等を行うことで意見や意識の共有化を促進している点は工夫がみられる。また、国際共同シンポジウムの開催などで目的を共有する仕組みを有していることは優れている。

モニタリング実施側からのコメント

- ・ 3大学間で実質的な意見交換をし、プログラム開発について意見や意識を共有する努力を行っている。
- ・ リスク・マネジメントというプログラム目標を具体的なコンピテンスの形で表現すれば、プログラム運営における参加大学間の相互理解が深まるだけでなく、一つの課程としての凝集性がさらに高まるのではないか。
- ・ 中国の大学では、学部長ないし副学長を巻き込んだ会議の決定が有効であるところから、用意されている各レベルの会合がどのように連携し、役割分担をしているのか、とくにトップレベルの会合が機能を発揮するように、どのように工夫がなされているのかが、モデル構築としては大事と思われる。

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

本プログラムは、発足以前に締結済みであった神戸大学大学院国際協力研究科と高麗大学校国際大学院とのダブルディグリー・交換留学・教員交流に関する協定を基礎とし、ここに復旦大学国際関係・公共事務学院を加えて三大学院間での学生交流・教員交流体制を発展的に構築したものである。

したがって、本プログラムでは発足当初から、交換留学に加えて、二大学の学位の取得が可能なダブルディグリー留学が可能となっている。ただしこの点については、「日中韓三国すべてで学びたい」というニーズには必ずしも応えきれないこともまた事実である。さらに、ダブルディグリー留学は協定を締結している大学院間でのみ可能であるため、例えば本学他研究科の学生は交換留学にしか参加できない。こうした問題の解決のためには、三大学共同でのジョイントディグリー制度の導入や協定参加機関の範囲を拡大するなどの方策をとる必要があるが、その場合にはカリキュラムの調整をはじめとする学位の質保証のための作業が極めて複雑になることが予想され、現行体制ではそのようなプログラムの拡大は難しいと考えられる。

○コメント

- ・ 一人の学生が日中韓で学ぶことが難しいとすれば、日中韓の学生が合同で討議したり、発表したり、文化に関する相互理解を紹介したりできるような機会を3大学で提供することで、3つの国の文化の違いなどを学ぶことができるのではないだろうか。自国と他の2か国をど

う学ぶかの工夫が可能ではないか。

- ・ 3大学すべてでの修学という計画については、博士前期課程の2年間で3大学で修学するのは、学生にとって移動が頻繁となり、かえって負担になる懸念はないかという点を検討していただきたい。
- ・ ダブル・ディグリーの対象となる2大学以外の1大学での履修単位を認定する方法も考えられるが、3大学が協力して実施しているプログラムのメリットとして、3大学の学生が一度に会する「夏季集中合同講座」のような取組みも考えてはどうか。
- ・ 神戸大学と高麗大学校の間の体制は、それなりに整っていると思われるが、復旦大学を加えた体制を構築し、機能させていくためには、3大学が一致できる人材の養成を明確にし、とくに中国の大学の指導部を巻き込んだ体制の構築がカギとなってくる。本プログラムの効果、魅力を復旦大学に理解してもらい、そこに巻き込んでいくために、国際シンポジウムや教員交流によるリスク・マネジメント教育への理解の増進等を積極的に図っていくことが、大事になってくるのではないと思われる。
- ・ 当初目的が、「グローバルなレベルのリスク・マネジメント人材の輩出」であり、各大学院がそれぞれの役割を持ってより質の高い人材の輩出に機能するということであるから、そのための仕組みを整え、本来目的に叶う体制を検討していただきたい。一方、他研究科の学生が、参加大学院で学びたいというのは本来目的とは別の課題であろうため、ジョイント・ディグリー制度については別途検討すべきである。
- ・ 本プログラムは、相手大学の中の特定研究科によって組成されており、他研究科の学生の扱いはさほど問題にならないのではないかと考える。
- ・ 大学の仕組み上、部局間のダブル・ディグリー協定を基礎にして、必要に応じて他部局に拡大していくのが現実的ではないだろうか。

基準 2 教育の実施**基準 2－1 実施体制**

目的を達成するための体制が、参加大学等の間で適切に構築され、機能しているか。

取組みの特徴

参加大学間でのコンソーシアム委員会、実務者会議が整備され、実施面での課題を共に検討する協力体制を構築している。神戸大学内ではプログラム委員会を設置し、他研究科との協力を図る体制ができている。教職員については、英語による教育ができる体制を構築しているとともに、キャンパスアジア室を設置して中国語・韓国語ネイティブや両国での教育研究経験を有する者を任用するなどの体制は優れている。以上のことから、質を伴った取組みの構築が進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

本プログラムを実施する神戸大学国際協力研究科及び復旦大学国際関係・公共事務学院、高麗大学校国際大学院は、それぞれ英語コースもしくは英語プログラムを持っており、構成する教員はほぼ全員が海外での豊富な英語（または現地語）による教育研究経験を有している。また、これら三大学院は、これまでも世界各地から多くの留学生を受け入れてきた実績があり、日本語・中国語・韓国語による研究教育についても十分な経験とサポート体制を有している。

（優れている理由）

英語を基礎として、併せて現地語での教育も行う体制を構築していることは優れている。共通言語を設定することにより、特定のテーマを有する教育プログラムが作りやすくなっており、英語で日中韓の地域研究が行われている。

本プログラムの実務関係を担当する「キャンパスアジア室」には、中国語・韓国語ネイティブの者や両国での教育研究経験を有する者、また英語をハイレベルに駆使できる者を任用し、プログラムの運用及び学生のサポートの体制を整えている。

（優れている理由）

本プログラムの実務や学生支援を行う室に各国の言語等に堪能な専門家を配置していることは、優れている。書面や e-mail のみでは把握が難しい事案も電話などにより直接的な処理が可能となっており、また学生支援の面でも十分に機能している。

モニタリング実施側からのコメント

特になし

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

本プログラムは日中韓の三大学院間の共同教育プログラムであるが、各大学の特性を維持しながら、教育や研究指導体制の細部にわたる共通性をいかに確保していくか、という点が、課題として挙げられる。

例えば、シラバスの編集スタイル（記載項目や内容・分量・言語など）や、候補者選考時に学生に求める研究計画の形式及び内容については、各大学の慣例に則って裁量に任される部分が少なくない。特に復旦大学からの受け入れ学生の場合、出身のコースにシラバスに相当するものがなく、学生作成の講義概要の提出を受けて参考資料とすることもあった。そのため、指導教員の選定に際してそうした認識のギャップが問題となる事態が、今年度には発生した。

各大学の他プログラムとのバランスなども考慮する必要があるため、すぐに形式的な共通化を実現することは難しいが、今後、ある程度のすり合わせを行いながら、交換留学及びダブルディグリー留学における研究指導の連携体制をスムーズなものとしていく必要がある。

○コメント

- ・ 研究指導体制についての細部にわたる共通性はそれほど重要なことではないが、むしろ教育の内容や方法における質の保証の観点からどのように共通性や通用性を確保できるかについて具体的に協議することで課題の解決が可能になるのではないかと。研究計画等の指導は異なる指導方針などを学ぶことの意義を議論してみてもどうか。
- ・ 目的整合性の点からは、プログラムの共通性ではなく、教育・育成の内容の過不足の方が優先される場合もあると思われるので、ダブル・ディグリーの仕組みの完成度に囚われることのない本来目的の実現度をまずは高めてもらいたい。
- ・ コンソーシアム委員会が副学長・理事が出席するレベルのものであることは重要であり、とくに中国の大学との意見調整では、指導部との協議は有効に機能することが多い。シラバスの記述の統一は、協働プログラムにとって、ひとつのメルクマールとなるものである。連携体制をスムーズなものにしていくために、各レベルの会合をどのように組み合わせ、機能させていくのか、そのあたりの検討が重要になってくるものと思われる。
- ・ 参加大学間での教育内容の統一のためや、派遣候補学生の履修指導の面から、各校でのシラバスの導入、あるいはさらにはその共通化を検討していただきたい。

基準 2－2 教育内容・方法

目的を達成するために適切な教育内容や教育方法が共同して検討され、実施されているか。

取組みの特徴

参加大学間の協議・調整を綿密に行い、コア科目を神戸大学・高麗大学校で開設している。セミナー、インターンシップ、海外研修を実施して、参加学生に多様な機会を提供していることは優れている。予定している数の学生の派遣や受け入れも行われている。以上のことから、質を伴った取組みの構築が進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

正規科目としてプログラムの教育体系に沿った「キャンパスアジア科目」を指定及び新規開設し、本プログラムの育成人材像に期待される知識やスキルを身につけるコア科目として位置づけている。本科目については、その単位取得をプログラム修了証明書（サーティフィケート）の交付条件としており、必須科目として履修する動機付けを与えている。なお、高麗大学校においても同様のキャンパスアジア特設科目が指定されており、復旦大学の学生もそのいずれかを留学先で履修することが可能となっている。

（優れている理由）

神戸大学において正規科目として「キャンパスアジア科目」を指定及び新規開設したのは優れている。高麗大学校でも特設科目を開設・指定し、今年からはリスク・マネジメントに関する科目が開設されるようになり、共同プログラムとしての教育内容の調整を行っていることは優れている。復旦大学では、公共政策学や行政学の支援からの教育が行われているが、四川大地震の被災地見学などを新たに実施するようにしたなど、キャンパス・アジア関連科目の充実を図る調整を今後も行い、共同プログラムとしての有効性を増す努力を引き続きお願いしたい。

国内外の専門家・研究家を招請して行われる「リスクマネジメントセミナー」は、平成 24 年度中に 6 回にわたって開催され、本コンソーシアムの枠を超えた国際的な付加価値を持つ教育機会を提供する場となっている。

インターンシップならびに海外・国内実習については、本年度は FHI360〔アメリカ合衆国・ワシントン DC〕での海外実習、ユネスコ・アジア太平洋地域教育事務所〔タイ・バンコク〕でのインターンシップが実施されたほか、国内でも東日本大震災に関連して東北地方でのインターンシップやスタディツアーを実施し、現地での経験を積む機会を学生に提供した。

（優れている理由）

セミナーの開催、インターンシップや海外研修の機会が提供されていることは優れている。特にユネスコ・アジア太平洋地域教育事務所には 2 名の学生がインターンシップとして参加し、同事務所のプログラムアシスタントの役職に就いた学生も出ており、有効に機能してい

る。日本から韓国に派遣している学生についても、インターンシップに参加している実績が出ている。

候補者の選考や評価については、候補者毎に研究計画書等の書類評価を行うとともに、キャンパスアジア室スタッフ、プログラム委員会委員からなる教員による面接も実施して、選考における信頼性の確保を図っている。

(優れている理由)

希望者を採用するということではなく、書類や面談等に基づいて学生を選考することでプログラムの質と水準を維持するという点での工夫が見られる。なお、相手大学の派遣候補者について、神戸大学側で改めて受け入れの選考を行い、その結果を派遣先大学に示してから公表することとしている。

モニタリング実施側からのコメント

特になし

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

まず、「キャンパスアジア科目」や「リスクマネジメントセミナー」といった教育機会を、プログラムの目的や学生のニーズに応じて、適切にかつ体系的・継続的に提供するためには、それにふさわしい人員措置（非常勤講師としての雇用、もしくは海外を含む遠隔地からの招聘）を講じなければならない。しかし、そのための経済基盤を本プログラムにおいてどこまで安定的に確保できるか、今後の不安は払拭できない。現在のところ、キャンパスアジア科目は、「臨時開設科目」として開講されている。

また、インターンシップのような学外での教育機会について、個々の学生の研究関心やキャリアプランに則してアレンジされるものであり、現在のところ、本学教員個人の努力によって開拓しながら提供している。また、インターンシップ（海外や阪神圏以外）の実施には、交通費や宿泊費用も必要とされる。プログラムの目的に即し、学生のニーズに合致したものを今後どれだけ確保し、学生に提供できるかという点についてはなお不確定な部分が残っている。

○コメント

- ・ 財政的側面は、プログラム実施にとってつねに大きな問題であるが、教育プログラムとしての持続性を実現できるよう、成果のアピール等、このプログラムの有用性を明確化して継続できる努力をしていただきたい。場合によっては他のプログラムに吸収するなり、何らかの形で残ることを期待する。
- ・ キャンパスアジア科目等の教育機会の提供は、人員措置によって保証されるべきものだが、そのための経済基盤が不安であるから、「臨時開設科目」としているのは、本プログラムの実施そのものが臨時であるという印象を、相手大学に与えかねず、少なくともプログラム

実施期間中の経費的な保証がある以上は、再検討の余地があるのではなかろうか。

- ・ インターンシップはマッチングから実習のチェック、評価に至るまで、大学側、教員側の負担が大きい。大学間連携等の利用を検討するなどの方途の検討をお願いしたい。「大学コンソーシアムひょうご神戸」でもインターンシップを実施されていると承知しているが、地元企業との連携を優先的に考慮してはどうか。

基準 2－3 学習・生活支援

学生が適切に学べる環境を形成し、学習・生活面の支援を行っているか。

取組みの特徴

相手大学からの学生も含め、参加学生に対する学習・生活面での支援が現在、十分行われている。特に国際機関の人事担当者による就職セミナー開催など、キャンパス・アジアプログラム参加学生の就職・キャリア開発支援を考えた取り組みを行っていることは優れている。今後、派遣前の事前学習・指導の充実、SNS の活用等による参加者・支援者の情報交換や生活・学習状況等の可視化、ペア学生制度等、より一層の支援の手段の検討を期待したい。以上のことから、質を伴った取組みの構築が進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

各校のシラバスについては、留学開始前に各派遣学生に参照できるようにするとともに、履修指導のためのオリエンテーションを実施している。また、学生便覧を各国語に翻訳し、留学先の情報入手に便宜を図っている。

(優れている理由)

シラバスを留学開始前にキャンパスアジア室で閲覧可能としていることや、各国語へ翻訳していることは、本プログラムの透明性を確保するうえで、有意義な取り組みである。それらをもとに学生に履修指導が行われていることは優れている。プログラム開始当初は相手国での指導体制や単位制度に関する情報が学生に十分に伝わっていなかった状況もあり、今後、キャンパスアジア室や相手大学との連携により、プログラムの内容や単位互換の制度に関する事前の情報提供をいっそう進めていただきたい。また、そのような中で、過去に参加した学生からの情報提供も重要となっており、学生ネットワークの構築にも引き続き尽力されたい。

本学留学生センターが留学生のための日本語日本文化教育プログラムを実施しており、修学上の諸問題については各部局やプログラムとの連携の下に専任教員が個別指導を行い、問題の解決に当たる体制が整えられている。また留学生センターは、新留学生を対象とする「外国人留学生ガイドブック」(日本語・英語・中国語・韓国語版)を配布しており、日本語教育、留学生相談、奨学金・宿舎情報等に関するオリエンテーションも行っている。同センターには相談指導部門もあり、各部局と連携しながら問題解決に至る助言を行っている。

(優れている理由)

受入れ学生に対して、TA 及びチューターが配置されるとともに、個別指導や留学生センターによる日本語プログラム等、学内の各部署の協力を得ながら、適切な支援体制が整備されている。

学内外の諸手続などの支援をキャンパスアジア室スタッフが行っている。宿舎については、神戸大学所有の宿舎だけではプログラムで受け入れる留学生全員を収容することが難しいため、通学圏内の賃貸アパートを一括して借り上げ、プログラム参加学生専用の宿舎として貸与している。

就職支援については、神戸大学大学院国際協力研究科の学生就職委員による「なんでも相談室」が毎月1回開催されており、世界銀行やアジア開発銀行、アフリカ開発銀行などの国際機関の人事担当者が毎年、研究科を訪問して、就職セミナーを実施している。さらに国際公務員養成プログラムを通して、国際機関のスペシャリストが就職セミナーを行っている。

(優れている理由)

各種の学習・生活面の支援を、中国語・韓国語を話せるスタッフなどのキャンパスアジア室のスタッフが行っており、機能している点は優れている。プログラム参加学生専用の宿舎については、参加学生間の交友を深め、将来の人脈形成に向けて有意義な取り組みである。国際機関の人事担当者による就職セミナーは、日本人学生のみならず中国や韓国の学生にとっても大変有意義なキャリア開発の機会となっている。

モニタリング実施側からのコメント

特になし

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

学習支援・就職支援については上記の通りの体制を整えているが、実際にダブルディグリー生が学位を取得し、交換留学生を含めて大学院を修了した者が出るのは平成25年度となるため、こうした支援の成果についてはいまだ評価が難しい。同様に、同窓会の組織についても、構想自体はプログラム発足当初からあるものの、実態としてはいまだ結成するに至っていない。こうしたものがスケジュールに上がってくるに従って、そこで生じた問題点をいかに拾い上げて適切に対処するかが今後、課題になると予想される。

○コメント

- ・ 修了学生のフォローアップは、今後のプログラム改善や学習成果の測定方法の策定のために重要であり、参加大学間で、協議を進めていただきたい。
- ・ 同窓会については、本プログラムを通じて形成された人脈の保持にきわめて有意義なものであり、本プログラムの成果をサステナブルにするために必要なところから、関係者の努力を期待したい。同窓会については各大学のみならずキャンパス・アジア参加大学全体で同窓会を考えることもできるのではないかな。
- ・ 学生の派遣と受け入れについては、さまざまな具体的な問題を、そのつど具体的に解決し

[大学名：神戸大学]

ていく必要に迫られる。担当教員の負担を軽減し、システムとして対応する必要がある。とくに海外への派遣学生については、既存の学生支援組織では対応が難しいところから、相手大学との協働による支援体制の構築が必要となるのではないかと。

基準 2－4 単位互換・成績評価

単位の取得や海外大学等との互換方法、成績評価の方法および海外大学等との互換方法が定められ、機能しているか。

取組みの特徴

プログラムの質に直接に関わるカリキュラムの水準、単位の認定水準、成績基準を参加大学間で協議し、質の同等性を図っている。単位互換のシステムが整備されているとともに、学位授与では神戸大学内の上位の委員会において確認を行うなど、厳格な手続きが定められている。以上ことから、質を伴った取組みの構築が進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

三大学間においては、本プログラムのコンソーシアム委員会において、各大学の履修コースのカリキュラムの水準、単位の認定基準、成績基準等を協議し、その質の同等性を確保している。それぞれのコースの講義科目を履修し、またインターンシップを実施した学生の成績については、各大学が自国の基準によって評価・認定を行うが、プログラムとしては最終的にプログラム運営委員会におけるコース修了判定を経て、修了証（サーティフィケート）を交付することとなっている。

（優れている理由）

コンソーシアム委員会において、参加大学間でのカリキュラムの水準や成績基準等が協議されたことは優れた取組みである。実際には、受け入れ学生については、相手大学で受講してきた科目リストをもらい、履修した科目がどのような内容かを確認して質の同等性についての判断を行っている。単位認定では、授業名から内容が判別し難い場合には学生から授業の詳細やワークロードを聴取した上で、学内の教務委員会に諮り、国際協力研究科の委員会でもレビューを受けるようになっている。カリキュラムについては参加大学間で開講が必要な授業の協議を行うことで、全体的な質を確保している。学生の質の確保という点では、派遣学生がダブル・ディグリーを希望していても、各大学の選考段階で学力に不安が残る場合は、交換留学に切り替えて送り出すことを実際に行っている。また、各科目の評価とプログラムの修了判定を分けているのは適切な方法であると思われる。

三大学の間には、既に全学及び部局間で関連協定が結ばれており、単位算定方式についても合意されている（なお、そこでは、各校の単位はすべて1：1で互換するものとされている）。

（優れている理由）

相手大学での授業時間数を実際に比較検討したうえで、参加大学間で単位互換のシステムを構築している点において優れている。

三大学間で締結されているダブルディグリー協定に定められたところ、また各大学が定めるところに基づいて、派遣元大学・派遣先大学それぞれにおいて必要な単位を取得し、論文審査に合格した場合は、両大学における学位授与審査を経て、双方の学位が授与される。なお、神戸大学におけるダブルディグリーの認定については、適切なプログラム設計による質の保証を全学的に担保するため、全学の教育に関する事項を審議する大学教育推進委員会、及び大学の国際交流の取組を審議する国際交流委員会において二重に審査した上で、役員会決定事項としている。

(優れている理由)

3大学で明確な協定があり、さらに、神戸大学においては上位の委員会において学位の確認を行うなど、厳格な手続きが定められていることは、学位授与にかかる質の保証に十分な配慮がなされている点で優れている。なお、ダブル・ディグリー授与のためには、2つの異なる修士論文をそれぞれの大学に提出して審査を受ける方法をとっている。

モニタリング実施側からのコメント

特になし

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

ダブルディグリー留学は平成24年度の秋学期から派遣が始まっており、こうした学生の学位取得については平成25年度以降となるため、まだ結果が出ていない状況である。そのため、修士論文審査や、修了延期を申し出てきた学生の扱いといった点への対応は、いまだシミュレーションの段階を出ていない。

また、単位互換については、交換比率は1:1という合意がすでに確立されているものの、講義の内容に基づく単位互換の可否判定については、講義名だけでは必ずしも判定できないため、平成24年度については各大学のシラバスをつき合わせて個別に判断するという作業を余儀なくされた。こうした作業の効率化、及びシラバスなど履修資料の共有もしくは共通化は、本プログラムにおける今後の課題となっている。

○コメント

- ・ 単位互換では、シラバスの詳細な突き合わせと、必要であれば内容の変更の要求、不足する時間については補講などを行う、などの努力が必要であると承知している。今後も弛まぬ改善を望みたい。
- ・ 単位やシラバスの共通化の経験は他大学にも参考になると思われる。可能な範囲で、他大学との情報共有もお願いしたい。
- ・ 学生が自分の成績を確認するシステムの構築は、たとえばネットによる共通の成績管理サイトの設置などは検討されてよいだろう。
- ・ 成績判定が合否だけでなく、5段階ないし9段階が各大学で混在する場合には、その調整が課題となるが、その場合には「優」等の分布割合の調整も検討しておかねばならず、

協議システムの機能が重要となってくるだろう。

- ・ 派遣先で取得した単位の認定についての情報を、派遣前に学生に周知するようお願いしたい。

基準 3 学習成果

教育プログラムの目的に即して学習成果を測定する方法を設定し、成果が適切にあがっているか。

取組みの特徴

派遣学生・受け入れ学生ともにマンスリーレポートの提出を課し、帰国後のシンポジウム学生セッションでの発表を求めるなど、学生の学習内容を把握する努力が継続的に行われており、有意義である。レポートの学習成果把握面での活用方法や、得られた課題点の共有・改善をする仕組みについて、引き続き深めていただくことを期待したい。以上のことから、質を伴った取組みの構築が標準的であると判断される。

抽出した優れた取組み

派遣学生及び受け入れ学生に対しては、全員にマンスリーレポートの提出を課し、日常的な学習状況とその成果についての報告を定期的に受けるシステムを整えている。こうした情報は、蓄積のうえ、必要に応じて本学及び留学先大学における学習成果の、単位などの数字に表れない部分に関する定性的な評価、及び学習上の課題点の把握に利用されている。

(優れている理由)

マンスリーレポートという形で定期的な報告書を提出させ、学生の学習成果や生活面の状況を適確・迅速に把握していることは優れた取組みである。学習成果把握の点での活用方法や課題点を教職間で共有・改善する仕組みについて、引き続き深めていただくことを期待したい。

平成 24 年度までにプログラムを修了した学生（本学関連）は、交換留学の 2 名（平成 23 年度：派遣学生 1 名〔神戸大学から高麗大学校へ派遣〕、平成 24 年度：受け入れ学生 1 名〔神戸大学が高麗大学校から受け入れ〕）である。このうち、平成 23 年度の交換留学生については留学先での単位取得状況を確認の上でプログラム修了証（サーティフィケート）を授与済みであり、本学修了後の就職状況も把握している（なお、平成 24 年度の交換留学生については、インターンシップを含めた成績の確定が平成 25 年度にずれ込んでいるため、サーティフィケート授与は平成 25 年度となる予定である）。また、両名からはともに留学レポートの提出を受けており、プログラムに関する満足度やその後の状況についての調査と情報蓄積を進めている。

ダブルディグリー留学生についても今後、学位取得・帰国後の満足度調査及びその後の状況把握を進める予定である。

また、プログラム参加者及び修了者については、派遣先大学からの帰国後、平成 25 年 11 月に開催される三大学共同国際シンポジウム（於：韓国・高麗大学校）で設置される学生セッションにおいて、成果報告を行うことが決定している。

(優れている理由)

レポートによって定性的な報告を求めるなどの方法は、単に知識量などで測定する方法のみに頼るよりも優れている。シンポジウムによる発表で学生が成果報告を行う機会を設けることは優れた取組みである。

モニタリング実施側からのコメント

- ・ 受講者の成績評価に当たって、教育プログラムの目的がどの程度達成されているかという視点をより勘案する取り組みに期待したい。
- ・ TOEFL スコアや、その他のプログラム進展を確認する KPI を設け、それらをチェックするなどの定量的なアプローチも欲しい。

※ KPI: Key Performance Indicator

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

今後、平成 24 年度のダブルディグリー派遣・受け入れ学生が平成 25 年度春学期以降に学位を取得し、それぞれ帰国する予定となっている。こうした学生のプログラム修了後、及びダブルディグリー取得後の状況を的確に把握し、プログラムの学習成果の測定や教育内容・指導方法の改善に生かしていく必要がある。そうした状況把握や調査の要領について、いかにスムーズに行う体制を築くかという点が、今後の大きな課題となっている。

○コメント

- ・ プログラム修了後の学生の動向はプログラムの教育効果の指標としてきわめて重要である。追跡調査、データ収集、蓄積の仕組みについても検討をお願いしたい。
- ・ 参加大学間の連携によるフォローアップが重要であるため、十分協議されたい。
- ・ 目的整合性、特に自大学院のみではできないグローバルなリスク・マネジメント人材の定義とその達成度評価、という視点でより具体的に評価の仕組みを整えられるとよいと思われる。
- ・ 定期的なレポートの提出のほかに、学生との面談も定期的に行うのが良いであろう。学生による自主的な発表も効果の測定には有効と思われる。

基準 4 内部質保証システム

内部質保証や改善のための体系的な取組みが、参加大学との連携のもとで行われ、機能しているか。

取組みの特徴

学生レポートを蓄積してその内容に基づいて改善方策を迅速にとっている。また、外部評価を既に実施し、その結果を公表していることは優れている。参加大学で、結果を共有し、改善に活用しようという努力を引き続き進めていただきたい。以上のことから、質を伴った取組みの構築が標準的であると判断される。

抽出した優れた取組み

本プログラムでは、プログラム参加学生に対してマンスリーレポートの作成を依頼し、教育内容に関する継続的なモニタリングを行っている。それらの情報は、本学のキャンパスアジア室に蓄積されるとともに、必要に応じてコンソーシアム委員会等に提供され、三大学における教育内容の質保証のための資料として活用されている。

(優れている理由)

マンスリーレポートを通じて問題の把握を行っており、そこに記された課題や要望事項に対しては、まずはキャンパスアジア室で相手大学へ改善要求をするなどの迅速な対応を図っていることは優れている。そこで解決が難しい事案は、プログラム委員会委員長と対応を協議し、中国・韓国の大学との協議が必要な場合には、年1回開催されるシンポジウムの際に3大学の実務担当者を集めて協議を行うなどの対応が取られている。また、マンスリーレポートに記載されていた情報を、翌年の派遣学生に見せて助言するなどの活用もなされている。

本プログラムの選考方法や派遣数などの実績については、国内外の外部評価委員、及び理事・副学長をはじめ、国際交流本部その他の学内関係部局から参加者を得る形での外部評価委員会を年度末に実施し、プログラムの実施状況と教育内容に関するレビューを行った。その内容については文書化及び翻訳（英語化）がなされており、一部はプログラムホームページを通じて公開されている。

(優れている理由)

プログラムに関する外部評価が行われていること、その内容が公開されてアカウンタビリティを果たしている点は優れた取り組みである。

モニタリング実施側からのコメント

特になし

大学が指摘した課題とそれに対するコメント**○大学が指摘した課題**

まず、外部評価委員会によるレビューは毎年度末に行われるため、教育プログラムとして本格的に稼動した初年度である平成 24 年度のレビューの検討及び改善のための議論は平成 25 年度へと持ち越されることとなった。このため、三大学間のコンソーシアム委員会レベルでの改善に向けた議論は、スケジュール的に 11 月まで待たなければならないこととなっている。よって、レビューを受けての改善計画の策定プロセスをいかにスムーズで合理的なものとするかが、今後の課題となっている。

また、公的資金助成の終了後のプログラム継続の方策については、高度かつ実践的な人材を引き続き養成するため、「学長裁量経費」を充当する他、継続的な冠奨学金を創設する予定であり、授業料免除などさまざまな支援を検討する。また、大学院生の研究成果の国際会議などでの発表や調査研究、ダブルディグリープログラムの学生受入れ及び長期インターンシップなどについては「神戸大学基金」等による旅費などの支援を行っていく。

○コメント

- ・ PDCA サイクルが 11 月まで待たねばならないことは学年度等の違いから仕方ない。しかし 3 大学で PDCA サイクルをどう動かすか、評価点検の事項は何にすべきかなどの準備は早い方がよい。
- ・ 改善のための議論をスムーズに行い、自大学での対策を用意するためには、キャンパスアジア室の上に置かれる委員会が、単なる評価委員会ではなく、学内的な調整機能と決定機能を備えた運営委員会となる必要がある。そのような体制が整えば、相手大学との協議も組織決定を踏まえた交渉となり、有効な結果をもたらす可能性が増すであろう。公的資金助成が学内の組織の改編や育成につながるならば、臨時の開設科目という問題の解決にもつながるものと思われる。
- ・ プログラム終了後の継続方法については、神戸大学での検討状況は評価するが、中韓の大学の計画策定を促す必要もあり、更なる協議を図られたい。